
助さん、格さん。俺だよ、俺オレ！

トオノキョウジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

助さん、格さん。俺だよ、俺オレ！

【Nコード】

N3907Y

【作者名】

トオノキョウジ

【あらすじ】

2011・11・05ブログ記事より

「…………ご隠居様？」

「あ、そうそうオレだよ、じじいのみっちゃんだよ！

実はさあ、出来心で江戸城の金に手つけちゃってさ。

このままだと副將軍クビんなっちゃうんだよね！

だからさ！ ホント申し訳ないんだけど、

今晚吉原の入り口、衣紋坂で待つてるからさ。

五百両！ 五百両だけ、ちょっと持ってきてくんねーかな！

悪い、ごめんねホント！ じゃよろしく！」

それは、旅籠で一息ついていた助三郎のスマホ（スマートほら貝）への、突然の着信だった。

相手の声は、確かにいつものご老公。だがしかしやけに軽妙に、まくし立てるような早口で言うだけ言って、一方的にぶちりと切られてしまったのだ。

「どう思う、格さん。着信は確かに、ご隠居のケータイからのものだったんだが…………」

眉間にしわを寄せて悩む助三郎に、格之進は肩をすくめて見せる。

「ま、今流行の何とか詐欺って奴だろう。あのご隠居がご公儀の金子に手を着ける等、考えられない事だからな」

端から電話の相手を信じていない格之進。

さらりと言ったのけられたその言葉に、助三郎も納得し頷く。

「そうだな。増してやご隠居は幼少の頃から、3つ以上の数字はすべて”いっぱい!”としか数えた事が無いほどの高潔なお方だ。五百両などという大金が、頭に浮かぶはずもないな」

そうしてほどなく助三郎も、電話の事はさりと忘れ去ってしまったのだった。

- - - - -

「どうやらお仲間は来ねえようだな」

夜の帳の下、煌々と燃える吉原の灯火。

衣紋坂で仁王立ちに構えている大男達が、光圀公を嘲笑う。

「くつつ、助さんに格さん。いざとなると冷たいもんじゃのう……」

頑丈な荒縄で、全身をやけに複雑な網目状に縛られた光圀公が、口惜しそうにそう漏らした。

助さんのスマホ（スマートほら貝）への着信は、確かに光圀公ご本人からのものではあった。

さすがのご隠居、ご老公と言えど、人助けばかりでは肩が凝る。

たまにはストレス発散とばかりに、遊郭で一晩（大富豪で）遊びに遊んだ結果、

突きつけられた請求は正しく、五百両ポッキリ。

持ち合わせの無い光圀公は、詰め寄ってきた若い衆の前を前に大慌て。頼みの印籠も無い。

連れに払わせるからと電話をかけたはいいものの、事を荒立てたくは無い。

呼び出し音が鳴る間悩みに悩み、結果あのようなファンキーな形で助けを求めてしまったというのが、事の真相であった。

「そいじゃ爺さん。ちと申し訳ないが、身体で払ってもらおうかね！」

いつせいに服を脱ぎ始める若い衆。

厚い胸板、つやつやの肌。たいまつの炎を艶かしく照らす汗。

淫靡な何かを思わせるご老公のお縄姿に、男達はもう臨界の可能性が極めて高かったのだ。

仕方ない、とでも言わんばかりに、重いため息を吐く光圀公。

「やれやれ。こんな老骨で面目ない限りじゃが、お望み通り身体で払うと致しますか」

若い衆の一人が、息を荒げながら光圀公の戒めを解く。

ほどけた縄と共に、はらりと落ちる羽織の音。

そして。

縄を解いた男の顎に、深々と食い込む光圀の拳。

声も上げずにどうと倒れこむ、哀れな犠牲者の最初の一人目。

「て、てめえ！ 何を……っ！」

頭目らしき一際背の高い男が、老人の突然の反目に狼狽を見せる。

「ええい、控えおろっ！」

「ぐえあ！」

「控えおろう！」

「ぬふう！」

言う間に二人の荒くれ者が、鳩尾に重い肘撃を刺し込まれ、悶絶する。

「ここにおわすワシを！」

振り下ろされる丸太をいとも容易く掌打で払い、音速の拳で鼻を折る。

「何方と心得る！」

抜き身の匕首をぐいと引き寄せ、重い頭突きでえいやと打ち据える。

「恐れ多くも先の副將軍……！」

四方から放たれた縄の網を、気合一閃、薙ぎ払った腕の風圧で弾き飛ばす。

「水戸！ 光圀公！ ご本人！ で！ あるぞ！」

裂帛の一言一句をその身に叩き込むように、人中を打ち、脾臓を蹴り、関節を極め、骨を砕く。

及び腰になった吉原の守人達を、容赦の一片も見せず次々と打ち倒す。

「頭が高い、控えおろう！」

と、日頃は格之進に任せきりだった決まり文句を言い終える頃には、既に頭を高く持ち上げられている者は、この場に誰一人として残ってはいなかった。

こうして、借金苦に困る善良な民がまた一人、ご老公のやさしいお人柄に、その身を救われたのでありました。

続ぬ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3907y/>

助さん、格さん。俺だよ、俺オレ！

2011年11月10日02時14分発行